翠緋の庭で

Rihitone

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
翠緋の庭で

【Ｎコード】
Ｎ６５１８Ｖ

【作者名】
Ｒｉｈｉｔｏｎｅ

【あらすじ】
人類が他星系の入植を始めた時代、「ＩＷＡＳＨＩＭＩＺＵ５」への入植を目指す日本の移民船団「行政特区サイハテ」。先行調査隊「イザナミ３」の７人のクルーは、惑星へと降下しようとしたところで謎の雲に吸い込まれてしまう。飛び出た先はまったく未知の世界だった。
複雑な状態にあるその世界は、「イザナミ３」のクルーに何を与え、何を奪うのか。彼らと彼らの周りの人々の物語。

第1話

「先行調査隊の検討を祈る。幸運を」

「司令長官殿に、敬礼！」

スピーカーから響く声に従い敬礼する。
モニターから返礼する司令長官殿の姿が消え、変わってカウントダウンの数字が現れる。

ここから先行調査隊操船士　五十嵐創介中尉の仕事が始まるのだ。

「こちら中央管制、イザナミ3、タイミングを委譲します」

「イザナミ3了解。タイミングは操船士にまかせる」

船長兼隊長の江川中佐の声が響く。

「操船士了解。発進最終シークエンスを開始する。」

慣れた手つきでコンソールを操作し、シークエンスを進める。各部の最終チェックを済ませると、船の推進力を最大にまで引き上げる。

「オールシステムオールグリーン！」

「了解。5，4」

陣代技士からの最終確認に答えるとカウントダウンを口に出す。

そんなこととしなくとも、各人の目の前のモニターにカウントダウンは表示されているのだが、気分というやつだ。

「3，2…ッ」

体にかかる強烈なGに意図せず顔をしかめる。操船といっても基本的にはコンピュータ制御だ。しばらくはやることがない。
しかめた顔はそのままに創介は、徐々に遠ざかっていく自分たちの母船へと目を向けた…

超大型移民船団「行政特区サイハテ」

日本初、世界5番目に建造された他星系への超大型移民・調査船団である。人口は18万人。居住区となる2つの船と、12の農業プラント船、8つの工業プラント船、4つの軍事ステーションからなる船団だ。船といっても巨大な鉄の塊ではない。居住区となる船の内部には、大きなドーム状の空間を設け、そこに都市を作った。少しでも地球に近い環境で航海ができるようにすることで、18万人という人数を、宇宙という特殊な環境でも生存できるようにしたのである。ちなみに行政特区の名の通り、内部の行政は完全に日本政府から独立している。特殊な環境であるため、その方が都合がよかったのだ。
目指すは地球から25光年の距離にある星系「IWASHIMIZU5」。その星系の第4惑星「IWASHIMIZU5－4」は生物こそ確認されていないものの、生存可能な条件を満たす惑星であることが分かっていた。35年をかけて移住する、国家の威信をかけて臨んだプロジェクトだった。

広大な宇宙に浮かぶ巨大な船団、そして家…徐々にその他の星の光の中に同化してゆくその姿を、目に焼き付けた創介であった。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーー

イザナミ3は、”減速”しながら宇宙を進む。隕石、小惑星その他諸々との衝突を避けるために、黄道面に垂直に、天頂方向から目標の惑星「ＩＷＡＨＩＭＩＺＵ５－４」へと接近する。しかし２５光年を３５年かけて移動する速度というのは、惑星の軌道に乗るためには余りにも早い。

先行調査隊は、その質量の大きさ故に減速するのに長い時間が必要となるサイハテを先行し、安全な減速ルートを確保するとともに、惑星の地表に降下用のマーカーを設置することを主な任務としていた。

「創介、前方２１３万ｋｍに氷。直径２８ｋｍ。回避だな」

響いた声はイザナミ3のレーダー手、２３歳の陣代智洋大尉。本来レーダー手の役割は、報告を上げるまで、どうするか決めるのは船長の役割である。

「それを決めるのは船長だ」

それに答えた操舵士、１９歳の五十嵐創介の手はしかし、既にコンソールを叩き、船もそれに従って回避運動をはじめていた。ちなみに、緊急時を除き、回避するかどうか決めるのは船長の役割であ

る。

「分かってるなら、私にその仕事をさせてほしいね。マーガレット、今の氷は航行ログとは別に報告あげといて」

諦めの多分に含まれた声の調子でそう言ったのは、イザナミ３の船長兼先行調査隊隊長。江川達也中佐だ。３８歳の妻子持ち。３８歳とは思えぬ精神の持ち主である。

「既にあげちゃった♪」

念の為に言っておくが、特別に上げられる報告というのは通常、船長の指示によって行われるものである。それを知ってか知らずか（いやそもそも知ってないのは軍人として問題があるのだが）勝手にやってしまったのは、情報通信士である伊藤マーガレット。実年齢は２０歳らしいのだが…船長の精神年齢を分けてやってほしい。

「クックック、部下が優秀だと上司は仕事が無くていいな。減速率を０．２ポイントから０．５ポイントへ。変えといたぞ、創介」

「アリガトウゴザイマス…」

創介の仕事をあっさりと奪っていったのは、最年長４６歳、技士の陣代智洋少佐だ。一から十まで技術屋さんなナイスミドルだ。コンタクトや視力矯正手術が当たり前となった今、ロストテクノロジーと言っても過言ではない度付き眼鏡を自作しているあたりに彼の性格がうかがえる。

「盗られる仕事があるだけいーなぁー　ね、美弥ちゃん？　あたし達なんて着くまでお仕事ないもんね？」

「ベルさんはまだいいですよ。着けば仕事あるんですから。私なんて着いても仕事があるかどうか…」

材料工学と地質学が専門の、サイハテ期待の若手女性研究者シャノン・ベル。そしてイザナミ3の火器管制官　宮藤美弥。

7人を載せたイザナミ3は、徐々に減速率を上げながら惑星「IWASHIMIZU5－4」の軌道へと侵入していくのであった。

――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

惑星「IWASHIMIZU5－4」には水が存在し、陸が存在する。しかし陸に繁茂する植物や、その上を歩きまわる動物の姿は見えず、海の中もまた同じ状況であった。地震が多く、火山活動も活発。鉄や銅などの金属を多く含む土壌は赤茶け、今は資料の中だけの存在となったテラフォームが行われる以前の火星に似ている。「IWASHIMIZU5－4」という惑星は、まだ若いのだ。

船内の声は自然と途絶える。無人探査機から送られてきた様々な資料。その中にはもちろん、「IWASHIMIZU5－4」のさまざまな景色を写したものが存在していた。しかし、直に見るのと媒体を通して見るのとではやはり違う。これから降下しようという位置にいるイザナミ3から見えるその景色は、これからここで生活してゆくのだという現実を、恐怖と不安、緊張感とともに、彼らに強く叩きつけていた。

「時間だ。降下シークエンスを開始する。可変翼稼働確認」

江川中佐がその時を告げる。全員の表情が引き締まる。

「可変翼稼働よし」

「排熱モード、大気圏内用に変更準備」

「変更準備よし」

降下前最後の船体チェックが行われる。陣代少佐の声からは緊張感が全く感じられない、年齢故か、技術に対する信頼故か、それとも他の何か。創介にはその余裕が少し羨ましかった。

「降下コース確認」

「コースよし。予定通りです。進路上に雲はありますが、降下に影響はありません」

「了解。・・・降下開始」

その声に合わせ、船体を地表に向けて加速させる。静かだった船内は、赤い光と、振動にさらされた。

ダダンッ、ダダンッ

時に大きく揺られるものの、船は順調に高度を下げてゆく。すでに青い空が広がり、眼前の赤茶けた大地は急速に拡大される。

「機首をおこしつつマッハ０．８まで減速。可変翼を開き水平飛行に移る。排熱モード切り替え」

「了解。減速開始、可変翼展開。水平飛行まで１５秒」

急減速に伴い体が前、地面に向かって押し出される。シートベルトが痛い。

「あの雲に突っ込むぞ、一瞬だろうが視界に…まて、」

コース上にあった雲、ただの積雲であったはずのその雲は、もはや雲と言える状態ではなかった。そのことは声を上げた江川中佐だけでなく、クルー全員に明らかだった。

雲は今や虹色に輝き、うねるようにしながら巨大化していた。そしてまるでイザナミ3を捕まえようとしているかのごとく、眼前に広がってきた。

「っく」

創介は本能的に回避しようと、船体を急旋回させる。だが船は言うことを聞かない。オーロラのごとく光を吐き出す白い塊に向かって突き進んでいた。

「駄目ですっ！　言うこと聞きません！　加速してます！」

創介の悲鳴にも似た叫びが響く。レーダーを見る内倉亮真の手は、目は、そして頭は、完全に止まっていた。彼の前にあるのは周囲の電磁気量を表すデータ。雲を中心として周囲１５ｋｍほどの空間が、

計測器の完全に振りきっていることを示すデータだった。イザナミ3でさえも、本来ならば計器が故障し場合によってはエンジンも恐らく爆発しているであろう値、当然人など生きられない値の中にいることを示していた。

「くそっ！　創介！　船の電源を落せ！」

「俺がやろう！」

「全員！　耐衝撃姿勢をとれ！」

既にコントローラを握るので手一杯な創介に変わり、陣代の手がコンソールを走る。身を守れという江川中佐の声が届いたかどうかは定かではない。直後、とてつもなく大きな揺れが創介達を飲み込んだ。

ただもし、この情景を外から眺める人がいたならばこう言うだろう。

『その船、イザナミ3は、白く、虹色の光を放つ雲に入り、そして消えた。まるではじめから何もなかったかのように』

第1話（後書き）

どうもはじめまして
Ｒｉｈｉｔｏｎｅと申します

初めての作品ですが、ストックのあるうちは3日1回更新で行きたいと思いますので、よろしくお願いします。

Ｒｉｈｉｔｏｎｅ

第2話

（おいっ　おいっ）

誰かに体を強く揺すられ、それで目が覚めた。創介の眼前、さっきまで「ＩＷＡＳＨＩＭＩＺＵ５－４」の地表と、虹色の光を発しながら巨大化してゆく雲を写していたはずのスクリーンは、今や全体がその雲と同じ状態の景色―（？）に占められていた。

「大丈夫か？」

「生きてるんすかね、俺達…　ここ天国じゃないすよね？」

優しくかけられた江川中佐の声に、ハハハと乾いた笑いとともに創介は答える。

「ここが天国なんだとしたら、俺は天国で死ねる方法を教えてもらいたいね」

「俺から状況を説明しよう」

自嘲気味に漏らされた内倉大尉の言葉を遮るように陣内少佐が説明をはじめる。マーガレットと美弥の二人はショックだったらしく、ベルさんが看ているとのことだ。

「これはあくまで俺の仮説なんだが…ベルも賛成してくれているし、大きく間違っているとは思えない」

「その前にいいですか？」

「何かね？」

これから仮説を披露しようと一息ついたところに迷わず差し込む。若干イラッとしたようだが、創介には是非とも確認しておきたいことがあった。

「なんでマーガレットと美弥には先に説明して、なんで俺だけ別なんです？」

「レディーファーストに決まって…いや冗談だ。君が彼女たちよりも図太い神経の持ち主だと確信しているからだよ。船長も、私もね。…そんなムッとするな、貶めてるわけじゃないし、気が散る。状況を説明するぞ」

「了解。お願いします」

彼、陣内少佐の一人称が私になったということは、彼の頭が真面目に働いていることを示すなによりの証拠だと、創介は学んでいる。そういうときの陣内少佐の言葉はまず間違いがないことも。それ故、彼が話した内容に創介は大きな衝撃と、絶望を感じずにはおられなかった。

「以上が、現状と、そしてこれからに関する私の仮説だ」

「つまり、我々は今宇宙の外側にいるってことですか？　そしてあれが自然現象だとすれば、我々はこのまま宇宙の外側を漂い続けるしか無く、誰かの意思によって引き起こされたものならば、その誰

かが我々を消し飛ばす以外の意図を持った存在であることを祈るしか無いと」

「まあそういうことだな。ただ、この場所に時が存在しているというのは大変興味深い。幸いにして私は、この空間について研究することで気を紛らわすことができるがね。何か集中できるものを見つけたほうがいい。辛くなるぞ」

何が、とは言わなくとも分かる。生きることが辛くなるのだ。当然のことだが、創介は孤独に対する訓練を受けている。だがそこで味わえる孤独は今の比ではない。いつまで続くか分からないという絶望感にも似た感情を抱いたのは初めてのことだった。気付かないうちに焦りを覚えていた。

だがその思考は、唐突な環境の変化によって吹き飛ばされる。

ピピー、ピピー、ピピー

内倉大尉の席から発せられる警告音。船体周囲の電磁波の観測結果を表示していたらしいモニターに大きな変化が現れていた。今まで船体が発するわずかな電磁波しか現れていなかったそのモニターには、船体前方に計器を振り切る電磁波が観測されたことを示していた。それは近づいているのか広がっているのか、イザナミ3が動いているのかどうかも判断できていない創介達には当然、それも分からない。

「どう、なると思う？」

江川中佐がゆっくりと、陣内少佐に問いかける。

「パターンが酷似している…どこかの空間に出るかも知れない」
既に己の指定席に座っていた彼は、コンソール上を走る手を緩めないまま、無機質にそう告げた。
「全員、体を固定しろ！　今、すぐにだ！」
怒声とも言える江川中佐の声が船中に響き渡る。創介はその声に飛び上がり、まさに条件反射といっていい速度で自分の席に着席、シートベルトで固定した。
「今度は気絶するなよ、創介」
「了解…っ」
始めは小さな振動だったそれは、瞬く間に巨大な揺れへと変化する。前、後、右、左、縦横無尽に振り回され、座席から放り出そうとする運動になんとか抵抗し、操縦桿にしがみつく。
「っく…」
誰のものともつかない声がスピーカから溢れてくる。
スクリーンの外を流れる光景はこれまでのものと比べてもなお異様であった。虹色の奔流はイザナミ３の船体を舐め回すように走る。白い光は眼を閉じても防ぎ切れないほどにあふれ…唐突にはじけた。
――

「飛んでるん…だよな？　俺達…」

「どうやらそうらしいな」

フーッと大きな息を吐くのが隣の席、江川中佐から伝わってきた。

「亮真、陣代。状況の分析を頼む」

「了解」

創介の目に映るのは、地球で見たどんな空よりも青く、どこまでも続いていそうな空と、眼科に幾重にも広がる白い雲。その雲の切れ目からは、「ＩＷＡＳＨＩＭＩＺＵ５－４」と同じ赤茶けた大地と、ところどころに点在する池か、それとも湖か。だが創介の目を奪ったのは、上の景色でも下の景色でも無かった。

遠い雲の合間から、空へと伸びる柱。雲を突き抜け空へと伸びる柱に創介の目は釘付けだった。

「なんだあれ…」

「幻ではないらしいぞ。画像解析にかけただけだが、大きさはー」

陣内少佐の言葉は途中で途切れる。

「キャーーッ」

いつの間にか美弥、マーガレット、ベルの3人もコックピット戻

っていたらしい。ひときわ大きい悲鳴はマーガレットのものだったが、残りの2人も似たようなものだっただろう。創介もまた、同じような状態だった。

美しく青い空は遠く背後へ、急速に近づいてくる雲を突き抜ける度に赤茶けた大地が、その地形が、より綿密になって現れる。だがその速度は「ＩＷＡＳＨＩＭＩＺＵ５－４」に降下した時のそれよりも遥かに速い。何よりも、真っ逆さまではなかった。

「イザナミ3」は、まるでだれかに蹴落とされたかのようにして、地面に突っ込んでいった。

第2話（後書き）

このお話は私Ｒｉｈｉｔｏｎｅの拙い知識に基づいて書かれています。
そのため、実際の物理現象では起こらないようなことが、平気で起こる可能性がありますが、あたたかい目で見守っていただけると幸いです。

Ｒｉｈｉｔｏｎｅ

第3話

ビーッビーッビーッビーッ

危険を知らせる警報がけたたましく鳴り響く。

「ＧＣＳを使え！」

「了解！」

江川中佐の指示に従い、創介はＧＣＳを起動させる。ＧＣＳとは、「Ｇｒａｖｉｔｙ　Ｃｏｎｔｒｏｌ　Ｓｙｓｔｅｍ」の略で、莫大な電力を消費する代わりに船内および船体にかかる重力をコントロールすることができるというものだ。これを使えば、設計上垂直離発着が困難な「イザナミ３」でも、垂直離発着が可能になる。

創介のスクリーンにはＧＣＳが正常に起動したことを示すサインが表示されていた。しかし船の落下は止まらない。

近づく地面。認めたくはない現実。ただ、操縦桿を握り締めることしかできない。頭の中が真っ白になるというのはこういう状態を指して言うのだろうか。地上の凹凸が手に取るように分かる。誰かが何か叫んでいるようだが、さっぱり分からない。

「へへ…」

知らず、創介の口から笑いがもれた次の瞬間

「へへへぐふぉうっふ　ぐっはぁぁ」

その笑いはなんとも言えない苦痛の叫びへと変化した。高度８０ｍ、突然消失したイザナミを突き落とす謎の力に変わって、全力で制動をかけていたエンジンと、同じく全力で働いていたＧＣＳが、その実力をいかんなく発揮した結果であった。

謎の力が消えた反動で、頭を操縦桿と座席にしたたかと打ち付け、絶賛悶絶中の五十嵐創介。ご自慢の眼鏡が、モニターに当たって曲がってしい、ショックに打ち震える陣代智洋。なんとか命が繋がりそうだと、尖らせていた神経を緩めた江川達也。人それぞれの思いを胸に、「イザナミ3」はゆっくりと、静かに、大地へと降り立った。

――――――――――――――――――――――――――――――――

眼鏡の修理も無事終わり、船体にはこれと言った損害が無いことを確認した後、全員がブリッジに集合した。

「創介と陣代少佐はクルトをセッティングして、あの液体の採取と分析を。亮真は大気の成分分析を。マーガレットはどことでもいいから通信を試みてくれ。美弥とベルには地質の分析を頼む。周囲の監視と指示は私が行う」

『了解！』

彼らはただの軍人（と学者）ではない。サイハテの安全を確保する先遣隊に選ばれた人材なのだ。原因不明の現象で、未知の世界に

来てしまった彼らだが、そこで生きるための、そして元の世界へ帰るための行動を速やかに開始した。

創介は陣代少佐と2人、クルトのセッティングを始めた。クルトは、前中後3個1組のキャタピラを本体左右に、計6個のキャタピラを持つ汎用作業ロボットだ。人の腕と同じだけの自由度を持ち、伸縮するアームを2本持っている。操作は基本的に人によって行われるが、プログラムさえ組んでやれば自律することも可能な一品だ。

「いつもより遅いな…やはり不安か」

通信関係のチェックをしていた創介を見て陣代少佐が問う。

「言わないでくださいよ。せっかく無視してたんですから」

「表向きは、な。大きな現実から目を逸らし、小さな現実、目の前だけに集中していいのは、大きな現実を見る奴がちゃんといる時だけだ」

「・・・・・・」

「お前のことだ、言わんでも分かってるだろうが。ここは「サイハテ」でもなければ「ＩＷＡＳＨＩＭＩＺＵ５－４」でもない。俺らのまったく知らない場所だ。もちろん「サイハテ」にいる連中も知らんだろう。もちろん捜索はされてるだろうが、見つかる可能性は極めて低いと言っていいだろう。あの現象はどう考えても恒常的なものではないからな」

「帰る方法は」

「絶対にある」

最後まで言うまえに、力強い返答が返ってきた。

「俺らは、「ＩＷＡＳＨＩＭＩＺＵ５－４」からここに来た。元研究者としての立場から言わせてもらうと、再現できない現象なんてないんだよ。必ず帰れる。ほら終わったぞ」

見るとそこには、液体を採取するための装置が取り付けられたクルトが完璧な状態で待機していた。相変わらず早くて正確な仕事だ。ショウサスゲー

手にしていた端末も、いつの間にやらクルトを操縦するモードになっている。これ・・・クルト側から逆にアクセスされたってこと？　少佐、恐ろしい子！

陣代少佐の「帰れる」という言葉に創介の不安はかなり和らぎ、精神的にもリラックスした状態になっていた。

――――――――――――――――――――――――――――――――――――

「よし、いいぞ」

「了解」

ハッチが無事に降りたという陣代少佐からの声を受け、クルトを発進させる。目指すは、北に２３０ｍほど離れた場所にある池だ。周りの土と同じ、赤茶けた色をしているが、液体であることは間違いない。もしあれが水であれば、ろ過すれば水源として使えるが、違った場合は自分たちの生存という点で非常にまずい事態に直面せざるを得なくなる。どうか水であってください、という祈りは創介だけのものではなく、「イザナミ３」のクルー全員に共通のものだった。

池に向かってクルトを走らせる中（手動なのでずっと操縦する必要がある）、内倉大尉がブリッジに入ってきた。

「大気の成分分析の途中経過です」

「ご苦労さま。どうだった？」

付近を監視するレーダーから目を放さないまま、江川中佐が先を促す。

「それが…驚いたことに、地球の大気の組成とほとんど変わりません。若干、アルゴンやキセノンといった希ガス系が多いようですが、誤差の範囲です」

特に驚いてるように聞こえなかったのは創介だけではないだろう。

「粒子とかからは何か引っかかった？」

未知の環境、特にこういった生物が生存できる環境では、常にある懸念が付き纏う。それは、未知の病原体やアレルゲンが存在しな

いか、ということだ。医学（薬学）の進歩によって、人類は様々な病気やアレルギーに対する特効薬を手に入れた。しかし、それはあくまで、現在確認されているものに対しての薬であって、確認されていないものに対して効くかどうかは分からないのだ。よって、空気中の微細粒子の採取と分析は常に行う必要がある。

「今のところ危険なものは確認していません。ですが、5種類の細菌は確認しました。簡易解析の段階では、危険なものとは判断されませんでした」

「となると、そっちはかなり忙しくなるね。今、陣代少佐が暇してるはずだから、手伝ってもらうといいよ。それよりも、ここにいる生命が私達だけじゃなくってよかったね～」

「でも細菌ですよ？　友達にはなれそうにはありません。失礼して作業に戻ります」

「うん、よろしく頼むよ」

相変わらず完璧な敬礼を残して、内倉大尉はブリッジを退室した。変わって入ってきたのは地質分析をしていたはずのベルさんだった。ということはそっちも結果が出たんだろうか？

「いいんですか？　軍人さんがそんなにたるんでて」

「たるんでるんじゃなくて、緩んでるんだ。レーダー監視は退屈な仕事だからね。何も写ってないのに気なんて張ってたらすぐに消耗してしまうよ」

「それはお疲れ様です。では退屈しのぎに、現段階での地質分析の

途中結果をお伝えしますね」

「よろしくお願いします」

「地表に存在している土及び岩石から、特に変わった元素は検出されていません。赤いのは酸化鉄を多く含有しているためのようです。また若干の塩を検出しました。また極僅かですが、水を確認しています。よって、あの池も恐らく水ではないかと思います。ひとまず水不足で干からびる心配は回避されそうですね」

「それは良いニュースだね。皆にも知らせてくれるかい？　プラス要素は少しでも多いほうがいい」

「はい、環境としては岩石砂漠といっていいでしょう」

「分かった、ありがとう。引き続き頼むよ」

「了解です」

にこやかに返したベルさんは、創介にも微笑みかけるとそのままブリッジを出ていった。

創介の操るモニターには、クルトから見た景色が映し出されている。視野を狭めるかわりに（といっても１２０。近くはあるのだが）画質を上げたそのカメラ映像には、坂の上から見下ろす形になった池の水面が映しだされていた。直径５０ｍほどのほぼ円形をしたその池は、赤い濁りのため底が見えず、どこか不気味だった。

「創介、池まではあとどのくらいだ？」

「あと１５ｍといったところです。もうすぐ着きますよ」

余談だが、クルトは不整地でも１～１．２ｍ／ｓで走行することが可能だ。今は下り坂で滑っていることもあって１．５ｍほど出ていた。

だが、そのクルトからの情報を表示する画面が一瞬、一瞬だが動きを止めた。すぐに正常な状態に戻ったのだが、そこに示されているのは各部の故障を示すメッセージだった。突然の出来事に唖然としながらも江川中佐に報告する創介。

「中佐、原因不明ですがクルトが機能停止しました」

「こちらでも確認した。マーガレット、陣代少佐と美弥を読んでくれ」

「了解！」

「何か…出てたんですか？」

「放電現象に伴うと思われる電磁波を池の方向から観測した。詳細は揃ってから話そう」

強力な電磁波は精密機器を容易に狂わせる。しっかりと電磁波対策が施され、少々のトラブルならバイパス回路等で自動復帰可能なクルトが一瞬で回復不能に陥るほどのダメージを受けた。その事実に唖然としたのも束の間、電磁波というワードに思わず溜息をついてしまう。

俺達をここに飛ばしたり、クルトを止めたり…便利すぎるだろ電

磁波

創介の泣きそうな思いは中佐にも共通だったのか、彼は創介よりも大きな溜息を落としていた。

－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－

「何があった！」

ブリッジに入ってきた陣代少佐は開口一番そう叫んだ。

「クルトが止まったよ。マーガレットからは聞いてない？」

「あ、すいません。伝えてません…」

若干泣きそうなマーガレット。操作はすばやいし、通達内容を間違えることも無いという点では、彼女はすばらしい通信士なのだが、その気の弱さが玉に傷。

「いや、言わなかったし気にするな」

江川中佐がすかさずフォローする。そうこうしている間に美弥もやってきて、陣代少佐の咳払いで話が戻る。

「それで、どうして止まった？」

「池の方から、一瞬だが強烈な電磁波が発せられた。強力な放電現象があった可能性が高い。タイミング的にもそれが原因だろう」

「また電磁波か…」

陣代少佐は溜i・・・いや、もういいか。

「創介、電源は何になってる？」

「緊急ってなってますけど、なんですかこれ？」

「俺が後付したものだ。クルトの通常電源系が完全に麻痺した時に使われる。壊れてることを教えてくれる機能しか持ってないがな。有るのと無いのとでは大違いだ」

「回収するには人が行くしかないか」

江川中佐の言を陣代少佐は肯定した。だがそれはもちろん危険をはらんでいる。あれ以降、新たな放電現象は確認されていないが、それでも一度起こったこと。いつまた、何が原因で起こるか分からないのだ。

「パワードスーツと武器の使用を許可する。創介と陣代少佐はクルトの回収に向かってくれ。幸い、電流および電磁波が危険なレベルに達するまでには3秒ほどの猶予がある。もしもの時は、3秒以内にジャンプしてやり過ごせは問題ないだろう」

結構危険なことをさらっと要求されたが、陣代少佐が何も言わないので創介もまただまって従う。

「美弥は不測の事態に備えて警戒態勢で待機。ガリスの使用を許可する」

「了解」

かくして、クルトの回収作戦が始まった。

大気の成分分析も、地質の分析も特にトラブルなく進んでいる中で、池から液体を採取するという任務だけがトラブルを抱えている。貧乏クジを引いたなとは思いながらも、操縦士という立場上、自分がクルトの操縦に適任であることは間違いないため、大人しくパワードスーツを装着する創介であった。

第3話（後書き）

お読み頂きありがとうございます。
自分の遅筆度が予想以上だったため、更新頻度を落とそうと思います。どれくらいにするかはちょっと未定ですが。

誤字・脱字等ありましたらお知らせください。

Ｒｉｈｔｏｎｅ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6518v/

翠緋の庭で

2011年10月8日13時36分発行